

体制転換と仕事に関する人類学的考察

— ブルガリアの村から見た社会主義、ポスト社会主義、EU拡大 —

An Anthropological Study of Political Change and Work Socialism, Post-socialism, and EU enlargement in Bulgarian Villages

松 前 もゆる

MATSUMAE, Moyuru

キーワード：仕事の人類学、体制転換、ジェンダー、労働移動、ブルガリア

key words : Anthropology of Work, Political Change, Gender, Labour Migration, Bulgaria

I はじめに

東ヨーロッパ諸国において社会主義体制が崩壊してから、既に四半世紀以上が経過した。しかし、筆者がフィールドワークを続けるブルガリアの村で話をしていると、以前ほどではないものの、中高年層には「社会主義時代はよかった」と昔を懐かしむ声は少なくない。無論、「今の方がよい」とはっきり言う人もいるが、社会主義時代の何がよかったのかを問うと、まず、「皆に仕事があった」との答えが返ってくることは多い。1950年代後半生まれのある男性は、「平均的なブルガリア人にとっては社会主義時代の方がよかった」という理由として、「皆に仕事があって一応の生活ができ、家を建てることも、貯金もできた」が、「今は一部の人たちだけが儲けている」ことをあげた。社会主義体制下で「労働」は社会的・経済的に基本的な要素とされ、男女ともに賃金労働に参加して「労働者」となることが政策として推進されたのであるから、「皆に仕事があった」のは驚くことではないが、ただ、社会主義時代の人びとの生活、および社会主

義からの体制転換をとらえようとするとき、「仕事（労働）」は、ひとつの重要なキーワードとなると考えられる。

一方、前段のような、いわゆる「社会主義ノスタルジー」に懐疑的な声もある。ブルガリアのEU加盟（2007年1月）前はとくに、体制転換期の危機を脱した後も経済が安定しない状態が続き、村でも生活の厳しさを嘆く語りが多く聞かれたが、1930年代後半生まれの男性は2003年夏のインタビューの際、「皆が何をそんなに嘆いているのか疑問だ」とし、「社会主義時代、協同組合が軌道にのって生活がよくなったが、集団化当初、60年頃までは大変だった。かつての生活が大変な時代を知らないからだ。」と語っていた。詳しくは後述するが、筆者の調査地はブルガリア中北部の山間に位置し、農業集団化は平野部よりも少し遅れて、1950年代後半に始まった。そのため年輩の人たちは、社会主義化以前、とくに集団化前の様子を覚えている。同時に、体制転換から20余年経った今、社会主義を知らない世代も成長し、学校を卒業して働きはじめ

ている。つまり、ここには、社会主義化もしくは集団化以前を知る世代と、社会主義体制が確立して以降に育った世代、それから、社会主義時代を知らない世代がくらしていることになる。こうした各世代の間には、仕事に対する考え方、仕事観や仕事をめぐる実践に違いがあるのか否か、調査地でのインタビューや参与観察から明らかになったことをもとに検討し、そのことを通じて人びとにとっての体制転換を考えてみたいというのが本稿の目的である。

II 体制転換と仕事へのアプローチ

東欧諸国における社会主義からの体制転換に関する人類学的研究には、さまざまな領域に注目したものがある¹⁾が、先に述べたように、社会主義が人びとに「労働者」であることを求める体制であった以上、市場経済への移行プロセスにおいて人びとが「働くこと」にいかなる変化があったのかは重要なテーマであり、研究者の関心を集めてきた。

体制転換後の労働をめぐる状況について、アメリカの人類学者ダンは以下のような興味深い指摘をしている[Dunn 2004]。彼女は、1990年代のポーランドにおいて、アメリカの企業が買収するかたちで民営化した食品工場でフィールドワークをおこない、民営化のプロセスは、単に仕事や経営のノウハウを移植するだけでなく、「人間とは何か？」という問いに関わると指摘した。というのは、社会主義時代、人びとは何よりもまず、「労働者」として想定されたからであり、市場経済下で労働の新たなマネジメントを通じ、個人を選択しリスクを負う者に転換することが、ポスト社会主義期の移行の中心であった。しかし

また、ダンによれば、以前から工場で働いてきた従業員たちの民営化への適応を可能にしていたのは、生産計画に応じた臨機応変な対処や培われてきた人間関係など、社会主義時代の経験であったという。

ただし、ここで問われている「人間」や「労働者」は、決して「性別がない (sexless)」存在ではないことに注意が必要である。社会主義時代、賃金労働への参加によって解放が達成されるとの考えから、男女を問わず「労働者」となることが前提とされたが、性別による差異がなかったわけではない。既に別稿で明らかにしたように、女性たちは、「労働者」であるだけでなく、妻や母であることも求められ、人生には「男性のライフコース」「女性のライフコース」が想定されていた[松前 2013 : 9]。また、性別による職種や地位の偏差、「男の仕事」「女の仕事」があったとされ、たとえば、女性の就労は、繊維産業や看護職、教職などに多く、一方、鉱工業や機械関連など「重労働」は「男の仕事」で、これらの職はより高賃金でもあった[松前 2013 : 8 - 9]。

こうしたことは、体制転換後にも影響を与えた。アメリカの人類学者ゴッドシーは、ブルガリア南部の鉱山町における体制転換後の変化を主題としたエスノグラフィで、社会主義時代には「労働者」および「男らしさ」の象徴であった鉱山の仕事を失った男たちが、宗教的实践を新たな男性性のよりどころとして見出していく過程を鮮やかに描き出している。この地域には、ブルガリアではマイノリティであるブルガリア語を母語とするムスリムが多く居住し、鉱山で働いてきた。しかし、体制転換後の経済危機によってその職を失っ

たとき、モスクを中心にネットワークを形成するとともに、より正統なイスラーム実践をおこなうことが意味を持つようになり、その結果、モスクに集まる男性やヴェールを身にまとう女性が増加するなど、「イスラーム復興」とされる現象が生じたのだとゴッドシーは指摘する [Ghodsee 2009]。

以上のようなダンやゴッドシーによる議論は、仕事（労働）という観点から体制転換を考察するうえで非常に示唆的であるが、同時に、主として賃金労働をめぐる変化に関心がむけられたものと言える。しかし、私たちの生活の中では、直接収入に結びつかずとも、社会の成員として「しなくてはならないこと」があり、それらもしばしば「仕事」と表現される。例えば、文化人類学者の中谷文美によれば、インドネシアのバリ社会では、儀礼の準備や実施もまた社会の成員としての「仕事」と位置づけられ、とくに供物づくりなどに時間をとられがちな既婚女性にとっては、収入を得るための機織りと儀礼の準備との両立が問題となるという [中谷 2003]。その一方で、家事については、じっさい既婚女性の負担は大きいものの、家族の中で手のあいている人がすればよいと考えられていた。こうした事例から分かるのは、どういった活動を「仕事」とし、それを誰がどのように担うべきかといった仕事観は、社会や時代によって大きく異なりうるということである。したがって、人びとにとっての「仕事」ととらえようとする際、収入の有無にかかわらず、生活の中で「しなくてはならないこと」をもふくめて検討しなくてはならないのではないか。

無論、人類学的な研究は、フィールドワークにもとづき、世界各地での人びとの生活と

その中での多種多様な仕事、働き方を明らかにしてきた。ただ、『仕事的人类学』の序章で中谷と宇田川が指摘するように、「それらを真正面から仕事や労働という問題として扱うことはむしろ稀」で、あるいは、主たる関心が個別の労働の現場に向けられる場合には、「個々の働く人々がそれぞれの生活総体の中で、他にも存在しているはずのさまざまなタイプの仕事をどう考え、それにどう取り組んでいるかという視点からの分析は必ずしも多くない」 [中谷・宇田川 2016 : 9] のが実状である。したがって本稿では、以上のことをふまえ、「人類学的なアプローチとジェンダーの視点を積極的に用いつつ、現代の仕事の複雑なありようを人々のリアリティに沿って浮かび上がらせていくこと」 [中谷・宇田川 2016 : 19] をめざすと同時に、「仕事」という観点から、人びとにとって体制転換がどのように経験されたのかを明らかにしていきたい。

その際、イギリスの労働社会学者、ミリアム・グラックスマンの「労働をめぐる全社会的組織化 (Total social organization of labour)」という分析視角が参考になるだろう。これは、「特定の社会におけるあらゆる労働がさまざまな構造、制度、活動、人々の間で分割され、配分されるあり方」 [グラックスマン 2014 : 27] を示すものであるとされる。ここで言う「あらゆる労働」には、有償労働のみならず、さまざまな「仕事」がふくまれており、とくに雇用労働と家庭内での活動の結びつきを視野に入れ、人びとにとっての「仕事」をトータルに把握しようとする試みである。1920年代以降のイングランド北西部、ランカシャーで就労していた女性たちの経験につい

てまとめた著作で、グラックスマンは、空間、時間、世代という次元を導入して分析し、「仕事」のありように関する女性の中の差異と多様性を明らかにした〔グラックスマン 2014〕。雇用労働や家庭内の無償労働などさまざまな仕事が空間、時間によってどう配分されているかに着目することで、世代や雇用条件の違いによって『女性であること』の意味とその生き方が多様であったこと〔グラックスマン 2014：109〕が描かれている。

グラックスマンの関心は、『仕事の人類学』で提起された問題意識と重なり、筆者自身、同書所収の別稿で、体制転換後のブルガリアの村における女性たちの「仕事」の様相を分析した〔松前 2016〕。その中では、直接収入に結びつく活動だけでなく、村内および家庭内で遂行される多様な仕事がどのように分業されているか、その性別分業のありようを明らかにしたうえで、市場経済移行後、女性たちの仕事の選択や仕事観が、ジェンダー規範や家庭生活、ヨーロッパやブルガリアの経済状況と政策などさまざまな要素と絡みながら、どのように変化し、また、変化しなかったのかを描いた。本稿ではさらに、グラックスマンの試みにならって、空間、時間、世代という次元を分析に導入し、社会主義化のプロセスも視野に入れることで、生活総体の中での「仕事」「働くこと」をより長いタイムスパンで把握することにつとめ、そこから人びとにとっての体制転換を探っていく。なお、本稿ではこれまで仕事と労働をとくに区別することなく使ってきたが、賃金労働に限らない、広義の「仕事」をさす場合に、「仕事」という語を使うこととする。

III 「仕事」をめぐる語りと実践

1 調査地および調査の概要

ブルガリアの村での仕事に関して具体的に述べる前に、本稿の調査地と調査の概要について述べておきたい。

まず調査地であるが、筆者は、ブルガリア中北部ロヴェチ県の主に2つの村（仮にA村とB村としておこう）で、1997年から継続的にフィールドワークを行ってきた。両村とも、過疎化や高齢化が進むブルガリアの農村部にあっては比較的人口を保っている村で、A村は人口2500人程、その住民は、ほぼ「ボマク」と言われる、ブルガリア語を母語としイスラーム的慣習を受け継ぐ人たち²⁾である。一方、B村は人口1000人程度で、長年にわたって、ボマクとブルガリア人正教徒、ロマが共にくらししてきた村である。現在、ブルガリアの全人口（700万人程度）のうち8割はキリスト教徒（主としてブルガリア正教徒）であり、ムスリムは約1割を占めるが、その大半はトルコ語を母語とするトルコ系住民で、「ボマク」はさらなる少数派と言える。

次に、本稿のもとになった調査は、主として2003年頃からA村およびB村で断続的に実施してきたインタビュー調査および参与観察である。1990年代末から2000年頃まではエスニシティや人びとのアイデンティフィケーションをテーマに調査をおこなっていたが、後述するように、この頃から他のヨーロッパ諸国への出稼ぎが目立つようになり、こうした国境をこえる労働移動への関心から、体制転換前後の仕事をめぐる変化についてインタビュー調査を開始した。その後、経済状況によっても変化する人びとの仕事のありように関する調査を続け、2016年夏には、A・B村

出身者が複数働くイタリア北部でも短期のフィールドワークをおこなった。

なお、B村には、上述のように、ポマク、ブルガリア人正教徒とロマがくらす、社会主義時代を通じて都市化が進み、B村ではとくに正教徒の若い世代を中心に都市への流出が続いたため、現在ではポマクが村の多数派を占める。したがって今回扱う事例については、とくに明記しない限り、A村とB村にくらす、あるいは両村出身のポマクに関するものである。

2 社会主義化と「仕事」—働く場所とジェンダー

前項で述べたように、本稿が対象としているのは、イスラームの慣習を受け継ぐ人たちである。かつてA村の村長（1930年代後半生まれ）と男女の役割について話していたとき、彼は、以下のように説明した。

我々には、女が家で働き、男が外で稼ぐという認識が昔からある。ここにはトルコの特徴がある。女性は家事や菜園、家畜の世話をするんだ。

実状はどうかはひとまずおくとして、少なくとも調査地のポマクたちの間では、「男がソト、女がウチ」といった規範や、女性は家の中にいて外に出るのは好ましくないといった考え方はトルコの、トルコ人の特徴とされ、周囲のブルガリア人正教徒よりも、自分たちはそれに近いと認識されている。だとすれば、社会主義化の過程で女性の就業率向上が目指されたとき、人びとには一定の抵抗があったように思われるが、どうなのだろうか。

ブルガリアは第2次世界大戦後に社会主義圏の一員となったが、村々においていきなり社会主義が確立されたわけではない。農村地域においては農業集団化、協同組合化がはかられたものの、A村・B村はともに山間部に位置し、広大な土地での大規模農業には向かないこともあって、平野部より少し遅れて1950年代後半に集団化が実施されることとなった。当初、女性の世帯外の就業に対する抵抗はあったという。あるA村の女性（1940年代前半生まれ）は次のように語る。

妻を外に出したがる夫はいた。うちの夫もそう。組合からC村〔A村の近隣〕での農作業の話がきて、姉が誘ってくれて朝迎えのトラックに乗ろうとしたんだけど、夫は広場で大声でわめきながら私をトラックの荷台から引きずり下ろそうとしたの。働きに行くのは認められない、〔送り迎えの〕トラックの運転手たちとふらふらして浮気をするから、って言って。（強調および□内の補足は筆者による。以下同じ。）

この「ふらふらする」という表現は、しばしば女性を外、ことに村の外に出さない理由としてあげられる。仕事以外にも、ある時期（1960年代くらい）まで女子の高校進学が少なかった理由を聞くと、「娘を村外の学校に行かせなかったのは、経済的問題もあるが、女はふらふらするから」などといった答えが返ってくる（義務教育は村内で修了できるが、高校は町にしかない）。「ふらふらする」とは、上の語りにあるように、恋愛や浮気といったことと結びつけて語られ、もし娘などがふらふらすれば、それは家族の「恥」であったと

語る人もいた。つまり、家族、とくに父や夫にとって、女性メンバー（娘や妻）のセクシュアリティを守りコントロールすることが、村の伝統的な性規範において重要であったと考えられる。そのため、女性が父や夫の目の届かぬ「外」、具体的には村外へ出ると、彼女たちの性をコントロールすることが難しくなり、問題も生じることから、社会主義時代の初期には村外での労働や進学に抵抗が示された。

であるからこそ、村における協同組合の成立を契機として、状況は徐々に変化したようだ。人びとは、それまでも自分たちの土地を耕して農業をしてきたし、それは女性も同様であった。農業集団化によって、協同組合で耕作や収穫、家畜の飼育などそれぞれの作業をおこなう「労働者」とならざるを得なかったが、まずは村内の土地で協同組合の作業をすることから、女性たちは賃金労働に参画していったという。A村の1940年代後半生まれの男性に、母親がどんな仕事をしていたか尋ねたところ、以下のような答えが返ってきた。

母たちは働いていなかった。働いていても、TKZS〔協同組合〕で、ここで働いていた。60年代、70年代に女性も働きに出るようになって、それ以降状況が変わった。

では、男たちはどこで働いていたのか。この時期、組合での農業をあきらめた人たちや、あるいは集団化や機械化によって生まれた農村の余剰人口は、政権による工業化政策の下、多数が都市の工業セクターに吸収された。B村の正教徒たちの中には、若い世代を中心として都市へと移住する人たちも多かった。しかしポマク住民の間には、集団内での結婚を

好み、町の高校へ進学したとしても、村へ戻ってくる傾向が強かったとされる。さらに後年、都市と農村のバランスをとるべく、村内や村から通える地域に工場が建設されるようになり、大勢が毎朝バスで職場へ赴き、夜には村へ戻るという生活をするようになった。社会主義時代の早朝、村の広場から近隣の職場へと一斉にバスが出ていく様子は、今でも語り草となっている。こうした工場や町の建築現場等の仕事には男性が多く就いたため、協同組合の農作業には、ますます女性の手が必要とされるようになった。

村外の仕事であっても、夫婦でともに働きに行った話や、もちろん、女性がバスで村外の職場へ通っていた話も耳にする。一方で、働く場所に関する規範として、女性は村内にすることが好まれる傾向があり、したがって、次にみるように、村でのさまざまな活動、たとえば敷地内での農作業や家畜の世話、さらには、冠婚葬祭の準備や参加といったことは、村に残る女性たちや年輩者が多く従事することになったと言える。

3 社会主義時代の生活と「仕事」一時間、世代、ジェンダー

では、社会主義時代の「仕事」のあり方はどのようなものであつただろうか。A村のある世帯（仮にDとしておく）を例にみてみよう。表1は、「社会主義時代に誰がどのような仕事（ブルガリア語で*rabota*³¹）を担っていたか」という筆者の問いへの答えをまとめたもので、年代は特定されていないが、土地の利用状況や飼育する家畜の頭数から考えて、1980年代半ばを想定していると考えられる。

まず、この時代には既に、夫婦がともに賃

表1 1980年代のA村・世帯Dの「仕事」(2003年のインタビューから再構成)

	仕事の内容	分 担
家での「仕事」	料理、掃除、洗濯 など 家の修繕 など	=女性 =男性
「個人利用」	庭の菜園 どうもろこし畑、牧草地(干し草づくり) 野菜畑 羊 7-8頭 乳牛 1頭	土日や帰宅後、休暇中に親夫婦、息子夫婦が行う。ただし、菜園は母と嫁が主に担い、草刈りは男性(世帯Dでは主に父親)が行った。羊と牛の放牧は依頼。送り出しと迎えは家にいる者(主として年輩者)
狭義の「仕事」	親夫婦および息子夫婦共に有職	

当時の世帯構成：親夫婦、息子夫婦(後に子ども)

金労働に従事するようになっていた。このとき、親世代は夫婦ともに協同組合の仕事をしており、1980年代前半に結婚をした息子夫婦も工場などで働いていた。一方、家での仕事に関しては、料理、洗濯、育児などは確かに女性たちの仕事と考えられてきたが、同時に家屋の修繕-時には建築もふくめて-はその家の男性の仕事とされ、男性の働きも重要であった。さらに、これら以外にも、賃金労働とは区別される家庭内の仕事が存在する。菜園(主として家の敷地内で野菜などを栽培する)や家畜の世話がそれで、流通の問題を抱えていた社会にあって、家族が自らの食糧を確保するうえで重要な営みであった。また、国の農業政策にかけりが見えはじめた1970年代から、組合員が決められた範囲で土地を利用し、羊などを家で飼育することを認める「個人利用」が計画達成の一手段として取り入れられ、より広い畑や牧草地の管理も家族の仕事となる。ただ、外での仕事とは別に時間をさかなければならないため、休暇中や土日に家族で、あるいは家にいる時間の長い者(主に年輩者)が作業をした。

このように親世代と子ども世代が協働して家計を支えるのは、筆者の調査地のみに限ったことではもちろんない。ブルガリア北西部

の村で体制転換直前から調査をしたアメリカの人類学者クリードは、1950年代から60年代にかけての農業集団化とそれにもなう都市化によって家族のサイズは一旦小さくなるものの、1960年代後半から70年代になると、3世代直系家族が復活する傾向にあったと指摘している [Creed 1998 : 133-135]。これは明らかに経済的な戦略によるもので、というのも、村の家族にとって、公的なセクターから収入を得ることと同時に、個人利用の土地で農作業をし、食糧を得ることも生活のために重要だったからだという。A村の世帯Dにみられるように、年輩の世代が主に農作業を担当し、若い世代は賃金労働から帰宅後や休みの日にそれを手伝えることで、仕事と時間を配分して、食糧や物品の流通が充分整備されていない状況に対処していた。この戦略は、親世代と子ども世代が同居していない場合にもみることができ、子どもたちは週末や休暇中に手伝いに来て、自分たちが食べるための農作物を手に入れるなど、拡大家族の実質的なつながりは生活を支えるものとして意味を維持続けた。

こうしてみると、ブルガリアの村で「しなくてはならないこと」としての「仕事(rabota)」は、必ずしも収入をともなう活動

だけではなかったことが分かる。クリードも指摘するように、公的なセクターからの収入は不可欠であったが、家族や親族のための仕事も重要であった。さらに後者には、家事や農作業にとどまらず、家の建設や結婚式、葬式といったときに親族や近所で助け合うこともふくまれていたと言える。調査地では、結婚式や葬式には多くの人が集まり、その人たちをもてなすために大量の食事を準備しなければならない。あるいは、家の建設のときにも、専門的な技術を必要とする作業は別として、レンガを積む、瓦を並べるといった際には、親戚や近所の人が手伝い、集まった人に対して食事を準備する必要が生じる。こうしたときに手伝いに行くことは親族や隣人として必要なことと考えられており、女性たちは前日から食事の準備を手伝うこともあった。

以上のことから、ブルガリアの村での仕事には、「収入」と「関係性の維持」という2側面がみられることを指摘しておきたい。家族や親族、さらには近隣の関係性を維持・強化するような一連の活動は、収入には直結しないが、村では明らかに、「しなくてはならない」「仕事」と位置づけられている。無論、これらの活動と賃金労働との兼ね合い、時間配分は問題となり、儀礼には村にいる時間が長い女性と年輩者が多く関わるようになったとの声も聞く⁴⁾。ただ、社会主義時代について尋ねると、協同組合については、「[仕事を休んだ場合] 手伝いを1人連れていったりして、後からその分〔休んだ日数分〕働いた」(1940年代前半生まれの女性)との説明もあり、また、工場などの勤務でも「上司と交渉をした」と語る人もいて、ある程度、時間の調整が可能であった面もうかがえる。このように社会

主義時代には、家族の中でさまざまな仕事を時間的・空間的に配分して、政治的・経済的变化に対応してきたことが明らかとなった。では、こうした仕事のありようは社会主義からの体制転換後どのようになったのか、次にみてみることにしよう。

4 ポスト社会主義期の「仕事」

1989年末の社会主義体制崩壊後、市場経済への移行過程でブルガリア経済は不安定化し、多くの国営企業は閉鎖に追い込まれるか、民営化して大幅なリストラを迫られるなど、多数の失業者を生み出す結果となった。それは、A・B村においても同様で、近隣の工場は閉鎖、もしくは大幅な縮小を余儀なくされ、協同組合は解体された。山間部に位置する両村では、集団化されていた土地が返還されても、個人による農業では自家消費や副収入にしかならず、専業農家で生活することは困難である一方、村内外の雇用が減少し、男女を問わず、失業した者も少なくなかった。そうした中で新たな選択として浮上したのが次項でとりあげる国外への出稼ぎであるが、本項ではまず、ポスト社会主義期の村での仕事についてまとめておきたい。

ここでも、A村の世帯Dを例に考えてみよう。2003年時点では親夫婦が年金生活に入っており、家での仕事が大きく増えている。ただ、仕事の内容や分担をみる限り、実のところ、社会主義時代とそれ程大きな違いがないことが分かる。

これについては、たとえば、B村の学校で働く女性(1960年代前半生まれ)も、「社会主義時代も今も仕事量としては同じ」とする。ただし彼女の場合、「将来への不安を感じる分、

表2 2003年時点のA村・世帯Dの「仕事」

	仕事の内容	分 担
家での「仕事」	料理、掃除、洗濯など 家の修繕、薪の準備など	=女性 =男性
(副業) ※ミルク、子 羊、蜂蜜、 酒は、自家 消費のほか、 売却もする	庭の菜園、畑（野菜など） 牧草地 果樹園（プラム） 羊 6頭 乳牛 2頭、仔牛 2頭 雌鶏 18羽、雄鶏 1羽 ミツバチ	主として親夫婦と嫁 他の家族は「手伝う」（収穫など） 草刈りは男性（父親） 果樹からの酒造＝男性 乳牛は「親夫婦のもの」で、世話は夫婦で担当 養蜂＝父親
狭義の「仕事」	親夫婦は年金受給者、息子夫婦は飲食店経営、子ども2人は学生	

精神的には今の方がきつい」とも語っていた。他にも以下のような語りが聞かれた。

「土地が返還されたので耕している。だけど、手仕事や牛での耕作で、以前〔協同組合時代〕のように収穫がない。より困難だけど、義務でやっている。」（B村の1950年代後半生まれの女性）

「社会主義時代と違うのは、かつてはどのくらい働いてどのくらい休めるか分かっていた。今は時間がまったくない。働いてあいた時間は農作業などをしなければならない。」（A村の1940年代後半生まれの男性）

広義の仕事の内容は実質的に変わっていないとされる一方で、時間的、物理的、あるいは精神的に以前よりきつくなったという思いが、本稿冒頭の社会主義ノスタルジーにつながっていると考えられる。ただ、先にもふれたように、逆の意見もある。たとえば、社会主義時代は協同組合で働き、体制転換後は夫婦で小さな会社をはじめたB村の女性（1950年代前半生まれ）は、自分たちや子ども家族の食用として菜園で農作業も続けており、「よ

り負担は大きいですが、自分にとっては〔今のほうが〕よりよい。働いた分だけ収入を得ることができる。」と述べた。この、社会主義時代より忙しいが、働いた分だけ収入を得られるとして現在を評価する語りは、会社や店などを持つ、起業をした人たちから多く聞かれる傾向にある。II節でふれたダンの指摘〔Dunn 2004〕にあったように、市場経済の導入により、個々人の位置づけが、仕事（労働）をめぐる選択する者、その分報酬を得ることもあるがリスクも負う者へと変化したことがうかがえる。

結果としてこうした動きは、仕事における収入（賃金）の持つ意味の増大にもつながる。B村にくらす1970年代前半生まれの女性は、村の年輩者たちも企業が募集する農園での作業に従事して賃金を得ていることにふれ、「社会主義時代は、年寄り、おばあちゃんの助けでやっていたが、年輩者の考え方が変化しているように思う。年寄りも可能なうちはお金があるようにと考えている。」と話し、収入を得ることに重きを置くようになった昨今の変化を指摘した。その一方で、「関係性の維持」に関わる活動が顧みられないわけではなく、したがって、依然として賃金労働との兼ね合い

が問題となることもある。

A村にくらす女性（1940年代前半生まれ）との会話から：

「女性たちの中には工場での仕事より農園での仕事を望む人もいる。毎日の義務ではないから。」

筆者が「なぜ、毎日の義務でない方がいいのか？」と尋ねたところ、

「自分のために料理をするようにと、〔仕事に〕行かせない夫もいる。家で仕事があったり、子どもがいたりする。」

社会主義時代を通じて、男性（夫）の方が多く稼ぎ家計を支えるものだとの通念が崩れることはなく、したがって、稼ぐことに重きがおかれる現状においては、男性は賃金労働を優先させる傾向にある。他方、「収入」と「関係性の維持」双方にかかわることを求められる女性たちは、矛盾に直面することがある。食事の準備をしなければならないような夫や子どもたちが家にいる場合、女性たちの少なくとも一部は、必要なときには家にいられる仕事、できれば村内の仕事を選ぶという。ただ、たとえば、自分の母親や姑など親族の女性が子どもの世話をしてくれる場合などは、若い母親も通いの仕事ができると考えられており、その意味で、拡大家族の中でさまざまな仕事を時間的・空間的に配分するという社会主義時代の戦略を用いながら、新しい時代にも対応していると言える。

5 国境をこえて働く—女性の国際労働移動という新たな現象

前項で言及したように、A・B両村からも、

EU加盟と前後してと言うより、ブルガリアのEU加盟が決まり、EU諸国への渡航に際しビザが不要となった2001年4月頃以降、国境をこえて出稼ぎに行く人たちが目立つようになった。社会主義体制の崩壊後、ブルガリアでは不安定な経済状態が続き、失業したり低賃金の職に就いていた村人たちの中には、職やよりよい待遇を国外に求める者も少なくなかったからである。具体的には、主に働き盛りの男性たちがドイツで建設労働に従事しているケースと、フランスやイギリス、ギリシアなどで農作物の収穫をはじめとする季節労働に従事しているケース（これは比較的若い世代のグループや夫婦単位での移動が多いという）、それから、30～60代の女性がギリシアやイタリアで高齢者介護を担っているケースがあげられる。

筆者はこれまで、とくに国外で高齢者介護等を担う、中高年女性の単身での出稼ぎに注目し、女性が村内で働くことが好まれる従来の状況から、なぜ国境をこえる移動が許容されるに至ったのか、その背景をジェンダーの視点をとりいれながら検討してきた〔松前2016；2017〕。そして、仕事とジェンダーをめぐる規範には、①仕事の内容面での性別分業規範、②収入の優位性（稼得役割）に関する規範、③働く場所にかかわる規範、という複数の側面があり、女性の国際労働については、ブルガリアで働くよりも報酬も高いことから、②③については従来の規範と合致しないが、ケア労働に携わるという点で①は維持しており、ジェンダー規範のある部分を揺るがず行為も、別の部分で規範にそうかたちで再解釈され、容認されてきたことを指摘した〔松前 2016:61-62〕。中高年の女性たちは、

ある程度手の離れた10代の子どもたちの教育費などを稼ぐ、つまりは「子どものため」に母親として出稼ぎを選択したことを強調していて、ここには「社会主義の“働く母親”イデオロギー」[Keough 2015:18]の継続をみることができる。

ただ、季節労働のように1年のうち一定期間は村にいる場合と異なり、恒常的に国外で働く場合、子どものために稼ぐことも母親役割の一部とみなされるとは言え、女性たちには自身の家族へのケアが期待され、「収入」と「関係性の維持」の兼ね合いはより困難な問題となる。それは、父親が出稼ぎに行った際、稼得役割を果たしているともみなされれば、家族へのケア役割はほとんど求められることがないとは対照的である。多くの場合、ブルガリアの学校などに通う子どもたちの世話は、親族の女性、主に子どもの祖母が代わりにおこなうものの、外国で働き続ける女性たちの中には、子どもたちから「自分を見捨てた」など批判的なことを言われ、悩んだという人は複数いる。そのため、出稼ぎを決めた当初、その多くが10代の子どもを持つ母親だった女性たちは、当時普及しはじめていた携帯電話、後にはSkypeやFacebookなどを駆使して、いわゆる「トランスナショナルな母親業」を遂行しようとしてきた。母親たちが出稼ぎをはじめてから10年余が経とうとする今、子どもたちも成長して、母親を頼って外国で働きはじめた者もあり、「母親業」は一段落したように思えるが、今度は親世代のケアや孫のために、稼ぐことと家族のケア（関係性の維持）の両立を求められるケースも出てきている。

たとえば、B村出身で、10年以上イタリアの家庭で住み込みのケア・ワーカーとして働

いてきた女性（1960年代前半生まれ）は、昨年、孫のためにブルガリアへ帰国する決断をした。孫の親である息子夫婦が離婚し、これまで彼女の夫と息子の2人で孫の世話をしてきたが、女手が必要と判断したのだという。他方、親世代のケアに関しては、病気の母親をイタリアへ呼び寄せた例もある。これらの事例からは、仕事としてのケアと自身の家族のケア、「収入」と「関係性の維持」の両立を求められ、それを何とか実現しようとする女性たちの姿が浮かび上がる。女性の国際労働移動は、体制転換後の「新しい現象（*neshto novo*）」とされ、依然人びとを戸惑わせているが、それを選択する人たちは、国境をこえて拡大家族の中でさまざまな仕事を配分し、新しい経済状況を生き抜こうとしている。

IV 考察 一人びとにとっての体制転換

以上、社会主義時代とそこからの体制転換後に、「仕事」や「働くこと」をめぐる人びとがどのような選択や実践をおこなったのか、ブルガリアの村における生活総体の中で把握しようとした。最後に、全体をまとめ、「仕事」という観点から、人びとにとって体制転換がどのように経験されたのか検討したい。

まず、ここまでにみてきたことから明らかとなるのは、人びとの仕事観や仕事をめぐる実践は、体制転換の前と後で突然変わるのではなく、徐々に変化をしてきたということである。社会主義時代には、男女ともに賃金労働者となることが求められ、調査地では女性の就業は村内で働くことから受容されていた。一方、ポスト社会主義期には、個々人は仕事（労働）をめぐる選択しリスクを負う者への転換が求められ、仕事の報酬としての

収入が重視される傾向が強まって、国境をこえる出稼ぎも選択されるようになるが、これも、従来の仕事観および規範の一部を受け継ぎ、それとは異なる部分についても再解釈されることで許容されてきたと言える。とくに女性の単身での国際労働移動は、子どものために稼ぐことも母親の役割の一部であるという、社会主義時代の“働く母親”像の延長にある。じっさい、現在40~60代となるこの世代の女性たちからは、「私たちの母親も働いていた」として、女性が働くことを当然のこととする語りがしばしば聞かれる。

こうした事実はまた、賃金労働といえども、経済的な意味のみならず社会的側面を持ち、働く人のジェンダー（男性性・女性性）や家族内での立場、たとえば父や夫、母や妻あるいは嫁としての地位と関わりながら実践されていることを映し出す。これはさらに、広義の「仕事」を視野に入れた場合には顕著であり、既に指摘したように、ブルガリアの村で「仕事」「しなくてはならないこと」と位置づけられる行為は、「収入」と「関係性の維持」という2つの意味をもつ。前節で具体的にみた通り、人びとにとって両者の兼ね合いは重要で、関係性の維持のために働き方を調整したり、職を変えたりといったようなこともおこりうる。賃金労働者化、収入重視の傾向が強まる中でも、とくに女性にはこれら2つの役割を果たすことが求められがちで、時に生ずる矛盾を解消するために、3世代拡大家族の中でさまざまな仕事を配分し、時代の変化に対応してきたと言えるだろう。

では、このように家族を核とした生活戦略は、体制転換後の東欧社会における変化としてしばしば指摘される、いわゆる「再家族化

(refamilialization)』のあらわれなのだろうか。ポスト社会主義の国々では、社会主義時代に整備された保育制度や福祉政策が後退し、男性を稼ぎ手とし女性が家庭をまもることを前提とした「再伝統化」「再家族化」政策がとられていると指摘されてきた〔Saxonberg and Sirovátka 2006 : 186〕。人びとが頼ることのできる社会制度は家族のみとなり、体制転換によって家族主義が強まったのだとされる。確かに調査地においても、家族という単位は生活するうえでの核となっており、国境をこえる出稼ぎにしても、「子どものため」「家族のため」に選択され、それ故に許容されてきた。ただ、中東欧諸国の家族政策を分析した仙石も指摘するように、体制転換後の家族政策の方針は国によっても異なり〔仙石2009〕、また、前節の記述から明らかのように、家族のつながりが実質的に生活戦略として重要だったのは社会主義時代も同様であり、「再」家族化と言えるかは疑問が残る。

さらに、本稿では詳述することはできなかったが、国際労働移動は、女性が、パートナーがいなくても自分と子どもたちの生活を支え、「シングル（この場合、主に離別および死別による単身者）」として生きることを可能にする側面を持つ〔松前 2017〕。これは、従来ブルガリアの村では実現困難であったことであり、それを考えると、家族主義が依然強いことは確かだが、「家族」とはどの範囲をさすのか、どういった人びとと支え合うのかについては多様化していると言えるのではないか。人びとの「仕事」の選択と実践において「収入」と「関係性の維持」はそれぞれ意味を持つが、後者に関し、最も重視される関係性としての家族の範囲は、必ずしも3世代

直系家族とは限らず、多様化し、それぞれの状況に応じて選択されるようになってきている。

V おわりに

本稿では、人類学的なアプローチとジェンダーの視点を積極的に用いつつ、ブルガリアの村における各時代の仕事のありようを人々のリアリティに沿って描くことを目指した。それはもしかすると、たとえばダンやゴッドシーが分析対象としたような、社会主義時代に「労働者」の典型・象徴として、工場労働者や鉱山労働者としてのアイデンティティを確立していたケースとは異なるかもしれない。調査地であるA・B村には、近隣の大きな工場に勤務し続け、そのことに誇りを持っている人もいる一方、たとえば生活戦略としていくつも仕事を変えてきた人たちもいる。ただ、社会主義時代の労働実践に本稿で描いたような側面があったことは確かで、したがって、これも社会主義時代および体制転換後の「仕事」をめぐるリアリティのひとつであると主張したい。

なお、本稿では、現代の仕事観や仕事をめぐる選択・実践において、社会主義時代からの継続性に光があたるかたちとなったが、それは、調査の対象とした働き盛りの人たちが社会主義を経験した世代であることと当然関係する。体制転換から30年近くが経過し、社会主義時代を知らない世代が働きはじめた今、若い世代の仕事観や仕事をめぐる実践は上の世代と異なるのか否かについて、今後さらに研究し検討する必要があるだろう。そうして明らかになったことと照らし合わせることで、人びとにとって社会主義経験とは何だったのか、あらためて検証したいと考えている。

謝 辞

本稿は、山形大学歴史・地理・人類学研究会第19回大会（2017年6月17日）での講演内容を、当日の質疑応答やご指摘をふまえて大幅に改変したものです。依然、頂戴したご質問やご指摘のすべてにこたえるものとはなっていませんが、そうした点につきましては、今後の研究で明らかにしていきたいと考えております。講演の機会をいただきました山形大学歴史・地理・人類学研究会の皆様、ご意見やコメントをくださいました出席者の皆様方に、あらためて感謝申し上げます。

- 1) 旧社会主義諸国に関する人類学的研究については、渡邊日日が東欧を対象としたものも含め検討している [渡邊 2002; 2016]。また、近年の研究のレビューについては、渡邊・佐々木 [2016] も参照されたい。
- 2) 前節で言及したアメリカの人類学者ゴッドシーがエスノグラフィで描いたのも、同じく「ポマク」と呼ばれる人たちである [Ghodsee 2009]。しかし、ブルガリアの近代化や社会主義化のプロセスで、少数派のムスリムに対する同化政策がたびたび実施され、調査地域ではとくに、若い世代を中心に「ムスリム」としての自認が薄れる傾向が見られるため、このように定義した。「イスラーム的慣習を受け継ぐ」とは、生活習慣（冠婚葬祭や衣食住）の一部に、この地域において「イスラームに由来する」とされる行為が見られることを意味する。もちろん、ブルガリアのムスリムが皆同様というわけではない。
- 3) ブルガリア語には *trud*（労働）という言葉もあるが、日常的によく用いられるのはこの *rabota* で、賃金労働を意味する一方、家庭内での農作業や料理、薪を切りそろえることや家の修繕といった報酬が発生しない活動をさして使われることもある。
- 4) 社会主義時代の東欧農村を調査したモノグラフでは、調査地と同様、儀礼が主として女性によって担われるようになる傾向があったと指摘されている [Kligman 1988, Bringa 1995]。

参照文献

Bringa, Tone

1995 *Being Muslim the Bosnian Way*.
Princeton University Press.

Creed, Gerald

1998 *Domesticating Revolution: From Socialist Reform to Ambivalent Transition in a Bulgarian Village*. The Pennsylvania University Press.

Dunn, Elizabeth C.

2004 *Privatizing Poland: Baby Food, Big Business, and the Remaking of Labor*.
Cornell University Press.

Ghodsee, Kristen

2009 *Muslim Lives in Eastern Europe: Gender, Ethnicity, and Transformation of Islam in Postsocialist Bulgaria*.
Princeton University Press.

グラックスマン、ミリアム

2014 『「労働」の社会分析：時間・空間・ジェンダー』木本喜美子監訳、法政大学出版局。

Keough, Leyla J.

2015 *Worker-Mothers on the Margins of Europe. Gender and Migration between Moldova and Istanbul*. Woodrow Wilson Center Press.

Kligman, Gail

1988 *The Wedding of the Dead: Ritual, Poetics and Popular Culture in Transylvania*.
University of California Press.

中谷 文美

2003 『「女の仕事」のエスノグラフィ：バリ島の布・儀礼・ジェンダー』世界思想社。

中谷 文美・宇田川妙子

2016 「仕事への人類学のアプローチ」『仕事の人類学』中谷文美・宇田川妙子（編）、pp.1-21、世界思想社。

松前もゆる

2013 「終わりなき「移行」の途上で：ブルガリア農村におけるライフコースとジェンダーの再編」『多民族社会における宗教と文化』16：3-26。

2016 「揺れる「男の仕事」「女の仕事」：ポスト社会主義期ブルガリアの農村女性たちの経験から」『仕事の人類学』中谷文美・宇田川妙子（編）、pp.47-69、世界思想社。

2017 「複数の場所を生きる：ブルガリアからイタリアへのケア・家事労働者の国際移動に関する試論」『盛岡大学紀要』34：11-22。

Saxonberg, Steven and Tomáš Sirovátka

2006 Failing Family Policy in Post-Communist Central Europe. *Journal of Comparative Policy Analysis* 8(2)：185-202.

仙石 学

2009 「中東欧諸国の家族政策：「新しい社会的リスク(NSRs)」の視点から」『西南学院大学法学論集』41（3・4）：171-195。

渡邊 日日

2002 「移行期社会の解釈から諸概念の再構成へ：ユーラシア社会人類学研究の観察」『ロシア史研究』70：41-61。

2016 Reflections on the Current Situations of the Cultural Anthropology of Post-Socialism: Concerning the Japanese and English Monographs. 『北方民族文化シンポジウム網走報告』30：15-22。

渡邊 日日・佐々木史郎

2016 「ポスト社会主義以後という状況と人類学的視座」『ポスト社会主義以後のスラヴ・ユーラシア世界：比較民族誌的研究』佐々木史郎・渡邊 日日（編）、pp.9-23、風響社。